

Title	「昭和30年代」の語られ方の変容
Sub Title	The change in the ways to refer to "the Showa 30s"
Author	寺尾, 久美子(Terao, Kumiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2007
Jtitle	哲學 No.117 (2007. 3) ,p.157- 176
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this paper is to analyze the recent change of how we look to and express conditions, goods and foods, plays, and other things in the Showa 30s (1955-64). Firstly, I pick up all the articles of Asahi news paper from 1985 to 2005, which contain the term "the Showa 30s", and then classify them into 4 categories, depending on direct reference to the things and affairs in the Showa 30s and some comparison with those at present. Thus, I find that the articles referring to the Showa 30s have shown little change in number in the recent years, and come to the same conclusion by making a comparison between the Showa 30s and the present. Secondly, I focus on the articles which have direct reference and compare the things and affairs in the Showa 30s with ones at present, and sort them into smaller, more specific 3 categories: 1) "public" themes (i.e., politics, economics, and other public matters), 2) "private" themes (people's everyday affairs, sentiment to them, and so on), 3) others (difficult to be classified into the former 2 categories). My finding is as follows: though the number of the articles using the method of comparison shows little change, in and after 1990s, there is a great fall in the proportion of the articles on "public" themes and equally great rise on "private" themes. This might be the result of the social changes in 1990s having influenced the themes of the articles about the Showa 30s.
Notes	特集記憶の社会学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000117-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

「昭和30年代」の語られ方の変容

寺 尾 久 美 子*

The change in the ways to refer to “the Showa 30s”*Kumiko Terao*

The purpose of this paper is to analyze the recent change of how we look to and express conditions, goods and foods, plays, and other things in the Showa 30s (1955–64). Firstly, I pick up all the articles of Asahi news paper from 1985 to 2005, which contain the term “the Showa 30s”, and then classify them into 4 categories, depending on direct reference to the things and affairs in the Showa 30s and some comparison with those at present. Thus, I find that the articles referring to the Showa 30s have shown little change in number in the recent years, and come to the same conclusion by making a comparison between the Showa 30s and the present.

Secondly, I focus on the articles which have direct reference and compare the things and affairs in the Showa 30s with ones at present, and sort them into smaller, more specific 3 categories: 1) “public” themes (i.e., politics, economics, and other public matters), 2) “private” themes (people’s everyday affairs, sentiment to them, and so on), 3) others (difficult to be classified into the former 2 categories). My finding is as follows: though the number of the articles using the method of comparison shows little change, in and after 1990s, there is a great fall in the proportion of the articles on “public” themes and equally great rise on “private” themes. This might be the result of the social changes in 1990s having influenced the themes of the articles about the Showa 30s.

* 首都大学東京大学院博士後期課程

1. はじめに——問題関心の所在

本稿は、昭和 30 年代を素材とする研究であるが、昭和 30 年代の事実関係の解明を主目的とするわけではない。ここでは、昭和 30 年代それ自体を検討するわけではなく、現在において昭和 30 年代がどのように語られているか、つまり現在における昭和 30 年代の扱われ方を検討する。これは、関心の焦点が過去それ自体ではないという意味で、過去のある時点における社会構成や社会現象を検討したり、通歴史的な社会変化を検討する歴史学や歴史社会学とは企図を異にする研究である。むしろ、「実際の」過去と現在における過去の捉えられ方の偏差を問題とするという点で、歴史学や歴史社会学の成果から得るものは大きい。しかし、本稿の関心はあくまで現代社会にあり、最終的に目指しているのは、過去の扱われ方を材料とした現代社会分析、特に社会意識の分析である。その目標へのささやかな一歩として本稿を位置づけている。

現代社会分析を目指すにもかかわらず、なぜ、現在進行中の出来事、問題ではなく、現在における過去の扱われ方という、一見回りくどい着眼をするのか。その理由は二つある。第一は、本質的な理由である。すなわち、過去の扱われ方に、その過去を扱う社会の集合的な自己把握があらわれると考えられるからである。現在において、過去はそれ自体として存在するのではなく、さまざまな形式をとった再構成としてあらわれる。そのため、その再構成には現在の社会関係、価値観、利害関心が反映される。現在における過去の語られ方、過去について語られる内容をみれば、過去それ自体だけではなく、あるいはそれ以上に、現在がどのようなものかわかるはずである。

これと関連して、第二の技術的な理由があげられる。すなわち、過去についての言説の分析によって、直接的に現在の社会意識を把握できることである。過去それ自体の事実関係の追究とは異なり、現在における過去の

捉え方は、多くの場合、言語を介在したものとなる。再構成が映像や展示という形式をとる場合でも、おそらくそこには有形無形のシナリオが存在する。すなわち、過去の再構成のうちには、再構成する者の視点が直接的に反映されていると仮定できるということである¹。このように考えれば、過去についての言説は、直接的に現在の社会意識を分析することを可能にしてくれる素材だと言えよう。これに対して、他の社会事象を扱う場合、それに対する当事者の視点すら、分析者が仮設しなくてはならない場合が多い。その点、過去の再構成を素材とすることは、社会意識を分析する上では都合がいいと言える。

以上のような着眼の前提は、過去の構築性である。過去の事物も出来事も、現在においてそれを提示される場合、起こった出来事や存在したものの「そのまま」ではなく、なんらかの形式をとった再構成とならざるを得ない。つまり、過去は「客観的な事実」ではなく、G・H・ミードが指摘したように、現在の観点から構築されたものであり、変化する現在によって常に書き換えられるということである² (Mead 1932; 片桐 2003)。過去は構築的であるからこそ、それを語る「現在」が変化することによって変化する。しかし、その構築や書き換えは、個人の恣意に委ねられているわけではない。モーリス・アルヴェックスが指摘したように、個人の属するさまざまな集団に由来する利害関心が、構築、再構築される過去のあり方を規定する (Halbwachs 1950)。こうした想定の上に、再構成された過去から、現在の社会意識の導出が可能となる。

本稿では、こうした観点から、新聞紙上の「昭和 30 年代」記事の分析をおこなう。ここで昭和 30 年代を取り上げるのは以下の理由による。一つには、そのデータ量である。最近、昭和 30 年代がノスタルジックな文脈でメディアに取り上げられることが散見される。いわば「昭和 30 年代ブーム」とでも言うべき事態が生じているのである。たとえば、2005 年にヒットした映画「ALWAYS 三丁目の夕日」では、昭和 33 年の東京

「昭和 30 年代」の語られ方の変容

が「貧しくても夢があったあの頃」として描かれていた³。また、昭和 30 年代を内装やメニューのテーマにした飲食店やテーマパークも近年増加している⁴。書籍に関しても、2001 年以降明らかに増加している。博物館においても、いくつかの博物館が昭和 30 年代の近過去を展示し話題を集めている⁵。このように、豊富な材料があるという点で、昭和 30 年代は他の時代よりも分析対象として扱いやすいと言える。

さらに、より本質的な意味で、昭和 30 年代に注目すべき理由がある。上述したような「昭和 30 年代ブーム」が、なぜ今起きているのか。現在の人々が、ノスタルジックな視線でその時代に関心を寄せるのはなぜだろうか。もちろん、「現実の」昭和 30 年代はユートピアではなかったはずだ。昭和 30 年代の社会を実際に経験した者は数多く、その意味では近過去としての昭和 30 年代は現代と地続きである。しかしながら、高度経済成長期に社会が激変した結果、われわれは「豊かさの追求と引き換えに失くした何か」を求めて昭和 30 年代を懐古しているのではないだろうか。「あの頃は、今より貧しかったが希望があった。それにひきかえ今は……」という言い方は、「昭和 30 年代ブーム」ではよく見られるものである。すなわち、昭和 30 年代をめぐる現在の社会意識から、現在の日本社会が抱える病症の診断へと進めるかもしれないということである。

以上の理由で昭和 30 年代に注目するのだが、先ほど述べたように、昭和 30 年代を素材としたものは、小説、映画、漫画、テーマパーク、博物館展示、書籍など、さまざまにある。そのなかで、新聞記事データに着目したのは以下の理由による。第一に、新聞記事はデータ数が多く扱いやすいと言える。たしかに、昭和 30 年代をテーマにした書籍も、2001 年以降出版件数が急増している⁶ (表 1)。表 1 は、タイトルまたはサブタイトルに「昭和 30 年代」という語句の入った書籍の時期別刊行件数である。1996 年から 2000 年にかけて出版された書籍は合計 10 件、同じく 2001 年から 2005 年にかけては合計で 34 件であり、経年変化を見るにはデー

表 1 「昭和 30 年代」タイトル書籍の
時期別刊行件数

刊行年代	件数
1966～70	4
1971～75	4
1976～80	3
1981～85	4
1986～90	10
1991～95	11
1996～00	10
2001～05	36

タ数が十分とは言えない。もちろん実際には、これ以外に、タイトルに「昭和 30 年代」という語句を含まなくても昭和 30 年代をテーマとした書籍は数多く出版されていると考えられるが、その数を正確に把握することは難しい。その点、新聞記事はのちに詳しく見るとおり、年ごとのバラつきはあるものの例年数十件のデータがあり、経年変化を見ることが可能である。

第二には、新聞記事そのものの持つ性質が本稿の目的に適しているからである。日本において新聞の購読者は一般の人々であり、そこにはそうした一般読者の意識が反映されている。言い換えれば、新聞記事にはある程度、その時代の社会風潮が反映されていると想定できる。新聞記事が表現しているのは新聞社および新聞記者の意識ではないかという反論もあるかもしれない。むしろ、記事に新聞社の方針や記者の選好が反映されることは言うまでもない。しかし、いかなるメディアといえども、受け手の興味や関心に配慮しなければ、メディアとして成り立つはずがない。あるメッセージが伝えられるのは、その受け手がいるからであり、その意味において、新聞記事は社会意識の表現なのである。これは、本文記事ばかりではなく、掲載された投書についても言えることである。

言うまでもなく、本来、さまざまなメディアの「昭和 30 年代」言説の

比較分析をおこなうのが望ましいことである。そうした展開を視野に入れつつ、本稿では試論的に、新聞記事分析をおこなうことにする。

2. 「昭和 30 年代」新聞記事データとその類型化

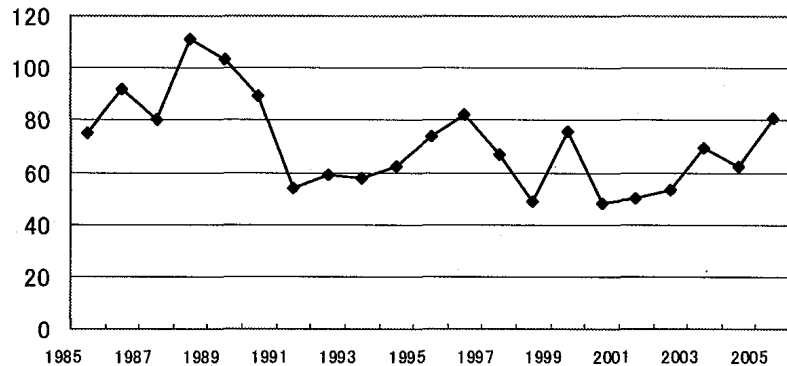
新聞記事のデータは膨大であり、そこから昭和 30 年代について書かれた記事を探し出すことは難しい。そこで、新聞社の公開しているデータベースを用いて、キーワード検索を試みた。1985 年から 2005 年までの、朝日新聞東京本社版紙部分における「昭和 30 年代」という文言を含む記事を全件検索した⁷。ただし、地方面記事のデータは割愛した。扱うデータが 1985 年以降の記事に限定されているのは、データベースがこの年からしか利用できないからである。今後、1984 年以前の記事についてもデータベースが利用できるようになった時点で、年代ごとの「昭和 30 年代」記事の傾向をさらに検討することとして、さしあたり 20 年分のデータを用いて、本稿のような研究の可能性だけでも明らかにしておきたい。また、新聞社ごとに顧客層が異なることを考えれば、本来、各新聞社の記事をデータとして検討すべきであるが、ここでは、朝日新聞のデータだけを示しておく。

記事検索によって入手した、それぞれの年の「昭和 30 年代」記事総数は表 2 のとおりである。だがこの数字を見るだけでは、長期的には減少傾向にあること、年ごとに微増、微減はあるものの、そこに傾向性は読み取りがたいことを、指摘できるくらいである。近年特に記事数が増加したとは言えそうもない。だが、そもそも、このように記事数だけから何かを言おうとすることには大きな問題がある。実際には、「昭和 30 年代の雰囲気にあふれた展示施設」といった、「昭和 30 年代」の文言を含みながら、実は昭和 30 年代について直接的には何の情報も伝えていない記事と、昭和 30 年代のなんらかの具体的なテーマを扱う記事が、データには混在しており、それを同列に扱うという不合理が存在するのである。

表 2-a 「昭和 30 年代」言及記事数

年	T (総数)
1985	75
1986	92
1987	80
1988	111
1989	103
1990	89
1991	54
1992	59
1993	58
1994	62
1995	74
1996	82
1997	67
1998	49
1999	76
2000	48
2001	50
2002	53
2003	69
2004	62
2005	81

表 2-b 「昭和 30 年代」言及記事数



そこで、記事の内容をいちいち点検し、基準を設けて分類してみることにした。基準は以下の視点で設定した。まず、昭和 30 年代についての直接的な情報がないか、あるか (A, B)。さらに、A は、昭和 30 年代についての直接的な情報がなく昭和 30 年代の事実についても言及していない記事 (A1) と、昭和 30 年代の事実について間接的に提示している記事 (A2) に下位区分した。B の方は、昭和 30 年代についての直接的な情報はあるが、現在との比較、関連づけが問題になっていない記事 (B1) と、現在との比較、関連づけが問題になっている記事 (B2) に区分した。

つまり、記事を以下のような 4 タイプに分類したことになる。

A1. 昭和 30 年代以外の時代についての情報中に「昭和 30 年代」という

文言が記述されているが、昭和 30 年代の事実についてまったく言及されていない場合。

例 [吉本興業が大阪に開業した] 笑店街そのものは博物館だ。昭和 30 年代風の町並みに、有名芸人の玩具店、バー、銭湯などを配し、吉本の歴史を見て歩く。[05 年 1 月 14 日朝刊]

例 アニメ「となりのトトロ」の主人公の家を実際に建てた「サツキとメイの家」は、昭和 30 年代の民家を隅から隅まで再現した。廊下のくすんだ感じを出すために火であぶったり、柿渋を塗ったり。ゆがんだガラスは古い民家から調達した。昔ながらの工法にもこだわり、3 億円かけて造った素朴な家だ。[05 年 4 月 28 日朝刊]

A2. 昭和 30 年代以外の時代についての情報だが、昭和 30 年代のなんらかの事実を間接的に提示している場合。

例 [愛知万博「サツキとメイの家」は] 昭和 30 年代の古びた家を想定している。廊下は柿渋を塗って古さを出した。実際にたける風呂は五右衛門風呂……テレビや冷蔵庫、クーラーはない……宮崎吾郎ジブリ美術館長は「戦後、日本人は物を増やすことを追い求めてきた。すっぴんな暮らしも気持ちいいなあ、と感じてもらえれば」と話す。[05 年 3 月 25 日朝刊]

例 [バリアフリー化の程度という観点において各県の県庁舎を比較すると] 最下位の青森とワースト 2 の高知はともに昭和 30 年代の建物。青森は車いす用のスロープを付けたり、介助人を用意したりするなどしている。[05 年 4 月 9 日夕刊]

B1. 昭和 30 年代についての直接的な情報があるが、現在との比較ないしは関連づけが問題とされていない場合。

例 昭和 30 年代の一時期、森内の祖父である故・京須行男八段の家に勝浦が下宿していたことがあり、その縁で森内の母……が勝浦に自分の息子を預けたのだ。[05 年 9 月 17 日朝刊]

例 昭和 30 年代初期，水俣市南部の海沿いの地区で「この辺りの猫は、狂い死にすいげな（狂い死にするらしい）」とうわさが流れた。だが、当初はあまり気に留めなかった……あれこれ報道があった後、「工場廃水に含まれる有機水銀が原因」と判明。[05 年 10 月 26 日朝刊]

例 昭和 30 年代，当時の池田首相のブレン下村治氏との経済成長論争は，世間の耳目を集めた。高度成長論の下村氏に，[吉野俊彦は]通貨や物価への影響を重視する安定成長論を掲げて一步も引かなかった。[05 年 11 月 7 日夕刊]

例 [熊本の] 馬刺しが郷土料理として一般化するのは昭和 30 年代以降という。漱石は阿蘇に遊んだ際、「草山に馬放ちけり秋の空」という句を詠んでいるが，馬刺しを食べたという記録はない。[05 年 11 月 12 日朝刊]

B2. 昭和 30 年代についての直接的な情報があり，かつ，直接間接に現在との比較ないしは関連づけが示されている場合.

例 昭和 30 年代までの日本の民家は，草屋根や板ぶきの屋根がかわら屋根に変わっただけで，本質的な変化はなかった……左官の壁は，接着剤や石膏ボードで作る壁のように短時間で仕上げるわけにはいかない。[05 年 4 月 25 日朝刊]

例 [入選短歌「基地の悲を語りつづけし留学生島民の願い未だとどかず」の] 作者注に「私の学生時代（昭和 30 年代前半）は沖縄の友は留学生でした」とある。今なお続く沖縄の悲哀を静かな口調で述べた句。[05 年 6 月 27 日朝刊]

例 舞台の「かっぱ橋本通り商店街」は道具街と並ぶ地域の中心で，上野と浅草を結ぶかっぱ橋のメインストリート。昭和 30 年代には 100 軒近かった商店数は 80 軒程度になり，売り上げも激減しているという。[05 年 6 月 27 日朝刊]

「昭和 30 年代」の語られ方の変容

表 3-a 内容別「昭和 30 年代」言及記事数 経年データ

	T (総数)	A1	A2	B1	B2	A1/T	A2/T	B1/T	B2/T
1985	75	0	4	11	60	0.0%	5.3%	14.7%	80.0%
1986	92	1	2	9	80	1.1%	2.2%	9.8%	87.0%
1987	80	1	1	8	70	1.3%	1.3%	10.0%	87.5%
1988	111	3	4	18	86	2.7%	3.6%	16.2%	77.5%
1989	103	10	9	14	70	9.7%	8.7%	13.6%	68.0%
1990	89	4	10	13	62	4.5%	11.2%	14.6%	69.7%
1991	54	0	6	13	35	0.0%	11.1%	24.1%	64.8%
1992	59	8	3	11	37	13.6%	5.1%	18.6%	62.7%
1993	58	2	2	15	39	3.4%	3.4%	25.9%	67.2%
1994	62	9	6	24	23	14.5%	9.7%	38.7%	37.1%
1995	74	3	10	17	44	4.1%	13.5%	23.0%	59.5%
1996	82	7	11	29	35	8.5%	13.4%	35.4%	42.7%
1997	67	9	8	20	30	13.4%	11.9%	29.9%	44.8%
1998	49	6	6	10	27	12.2%	12.2%	20.4%	55.1%
1999	76	8	6	20	42	10.5%	7.9%	26.3%	55.3%
2000	48	6	4	12	26	12.5%	8.3%	25.0%	54.2%
2001	50	7	3	18	22	14.0%	6.0%	36.0%	44.0%
2002	53	7	5	18	23	13.2%	9.4%	34.0%	43.4%
2003	69	9	13	11	36	13.0%	18.8%	15.9%	52.2%
2004	62	10	8	16	28	16.1%	12.9%	25.8%	45.2%
2005	81	14	9	19	39	17.3%	11.1%	23.5%	48.1%

※言及内容 昭和 30 年代について…

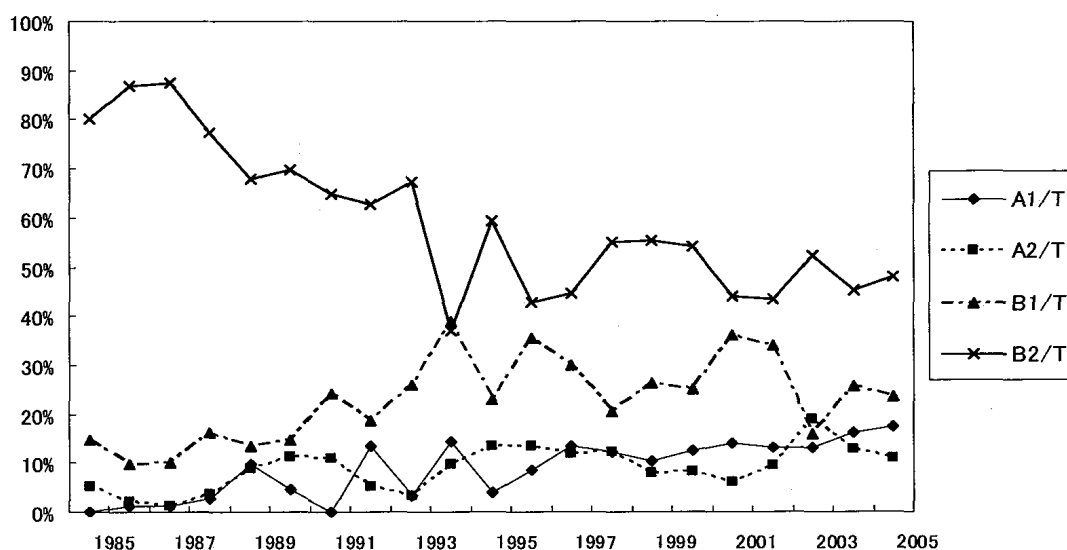
A1: 情報なし

A2: 情報なし (間接的にはあり)

B1: 情報あり, 現在との関連づけなし

B2: 情報あり, 現在との比較・関連づけあり (比較・参照型)

表 3-b 内容別「昭和 30 年代」言及記事数 総数に対する比率の推移



その結果が表3である。まず、総数の点では、先に述べたように、1980年代末のピークの後に急減したが、その後は、微減と微増のゆるやかな波動を示しているように見える。2000年代に入って顕著な増加を示しているとは言いがたい。次に、A1, A2は、年ごとに数字の増減が著しいが、時代が下るにつれて増加傾向にあるとは言えそうである。現在もしくは昭和30年代以外の時代を扱う記事に「昭和30年代」という文言が入ってくるということは、ある社会風潮を反映しているかもしれない、これ自体が興味深い傾向ではあるが、この数字だけで何かを言うにはデータが少なすぎるだろう。

B1, B2は、直接的に昭和30年代を扱う記事であり、B1は現在との比較が問題になっていないケース、B2は問題となっているケースである。このうち、特に注目すべきはB2の、現在との比較もしくは現在と関連づけた記事である。もし現在が「昭和30年代ブーム」と言える状況にあり、昭和30年代の語られ方が特徴的に変化しているならば、それは現在の社会とのなんらかの関連によって生じる変化であろうから、B2項が増加しておかしくない。しかしながら、表3の最右列、総数に対するB2記事の割合は、前半10年は急減の時代であったが、後半10年については有意な変動は見られない。

このことは、表4のように1985年のデータを割愛して5年区分でまとめてみるとはっきりする。1986~90年期は、B2のタイプ、昭和30年代と現在の比較記事は数も多く、記事総数に対する比率も高かったが、91

表4 内容別「昭和30年代」言及記事数 経年データ (5年区分)

	T (総数)	A1	A2	B1	B2	A1/T	A2/T	B1/T	B2/T
1986~90	475	19	26	62	368	4%	5%	13%	77%
1991~95	307	22	27	80	178	7%	9%	26%	58%
1996~00	322	36	35	91	160	11%	11%	28%	50%
2001~05	315	47	38	82	148	15%	12%	26%	47%

「昭和 30 年代」の語られ方の変容

～95 年の昭和 30 年代記事総数が急減した時期に、比較タイプの記事は数の点で半減し、総数に対する比率も大幅に低下した。96 年以降は、数の面でも比率でも、91～95 年期と比べて微減、もしくはあまり変化がないと言えそうである。

要するに、朝日新聞記事に関する限り、「昭和 30 年代」言及記事が近年特に増加しているわけではない。また、昭和 30 年代と現在を比較した記事も数字上では増加していない。では、「昭和 30 年代ブーム」とは一部の現象であり、それはまったく新聞記事には反映されず、限られたメディアでのみ取り上げられているのだろうか。そこで次のように仮定してみる。近年「昭和 30 年代」言及記事の内容に変化があり、それが、われわれの目に「昭和 30 年代ブーム」を印象づけているのだと。この仮定を確認するために、記事の内容の質的判別が比較的容易な、表 3 の B2 タイプ記事を、さらに次のように分別して、詳細に検討してみる。

B2. 昭和 30 年代についての直接的な情報があり、かつ、直接間接に現在との比較ないしは関連づけが示されている場合。

B2-1. 政治・経済等、公的領域の諸問題をテーマとする場合（「公論」的テーマ）。

例 [連合元会長・笹森清の] 懸念は少なからず当たった。02 年、経団連のアンケートに答えた企業の 91% がベアゼロに追随。昭和 30 年代に始まった春闘の転換点となる。[05 年 10 月 12 日 夕刊]

B2-2. 人々の日常生活、日常的な意識や感情をテーマとする場合（「私生活」的テーマ）。

例 昭和 30 年代、経済発展に伴い、国内各地の工場で労働者不足が生じた。中学校を出たての鹿児島の子どもたちも「金の卵」として、電化前の鹿児島線に乗って京阪神方面に旅立っていった……当時、私の娘は小学生だったが、ゆくゆくは同じ立場に

なるのか、と悲しくなった……あれから50年、子どもたちは
 どうしているのだろう。[05年6月22日朝刊]

B2-3. 上記2ケースのいずれにも該当しない場合.

例 私は車好きで、2度目の車検を受けたことのないほど買い替えていたが、昭和30年代から40年代にかけては、新車でありながらトラブルが多かった。しかし、それ以後、私が買い替えた車はほとんどトラブルが発生しなかった。[05年4月8日朝刊]

上記分別基準の B2-1 は、昭和30年代と（記事掲載時点における）現在をなんらかのかたちで関連づけつつ、公的領域としての政治や経済等の問題に言及するというタイプである。これを「公論」的テーマの「昭和30年代」記事と呼ぶことにする。これに対して、B2-2 は、関心が私的領域にある場合であり、たとえば、人々の生活や趣味の変化や風俗の変遷などを扱うタイプである。また、上記の集団就職についての記事の例のように、「公論」的な問題を扱っていても、結局のところ個人的な感慨に帰着するようなタイプの記事も、このカテゴリーに含める。このタイプはいわば「私生活」的テーマの「昭和30年代」記事と言えよう。ちなみに、B2-3 は、学会や芸術の動向、上記例のような技術の発展などの事例である。もちろん、このタイプも B2-1, B2-2 と間接的には関連があるかもしれないが、分別にあたりいちいち詳細な検討をしないとその関連を説明できないような場合は、「その他」としてここに分別した。

なお、「公論」的テーマと「私生活」的テーマという区分は、近代以降の人間活動が公的領域と私的領域にきびしく分離されているという理解に依拠している。私的領域は、個人の自律に委ねられた領域であり、公的領域は、正統化された各種権力の支配する領域である (Habermas 1990)。公的領域の問題と、私的領域の問題では、われわれに求められる対応が異な

「昭和 30 年代」の語られ方の変容

表 5-a 比較・参照型「昭和 30 年代」言及記事数 言及領域別経年データ

	T (総数)	B2T	B2-1	B2-2	B2-3	B2-1/B2T	B2-2/B2T	B2-3/B2T
1985	75	60	49	11	0	82%	18%	0%
1986	92	80	64	8	8	80%	10%	10%
1987	80	70	51	7	12	73%	10%	17%
1988	111	86	52	16	18	60%	19%	21%
1989	103	70	37	16	17	53%	23%	24%
1990	89	62	34	24	4	55%	39%	6%
1991	54	35	18	12	5	51%	34%	14%
1992	59	37	16	15	6	43%	41%	16%
1993	58	39	13	20	6	33%	51%	15%
1994	62	23	13	8	2	57%	35%	9%
1995	74	44	17	22	5	39%	50%	11%
1996	82	35	8	17	10	23%	49%	29%
1997	67	30	9	19	2	30%	63%	7%
1998	49	27	12	12	3	44%	44%	11%
1999	76	42	16	23	3	38%	55%	7%
2000	48	26	7	16	3	27%	62%	12%
2001	50	22	9	11	2	41%	50%	9%
2002	53	23	4	16	3	17%	70%	13%
2003	69	36	13	19	4	36%	53%	11%
2004	62	28	1	25	2	4%	89%	7%
2005	81	39	14	23	2	36%	59%	5%

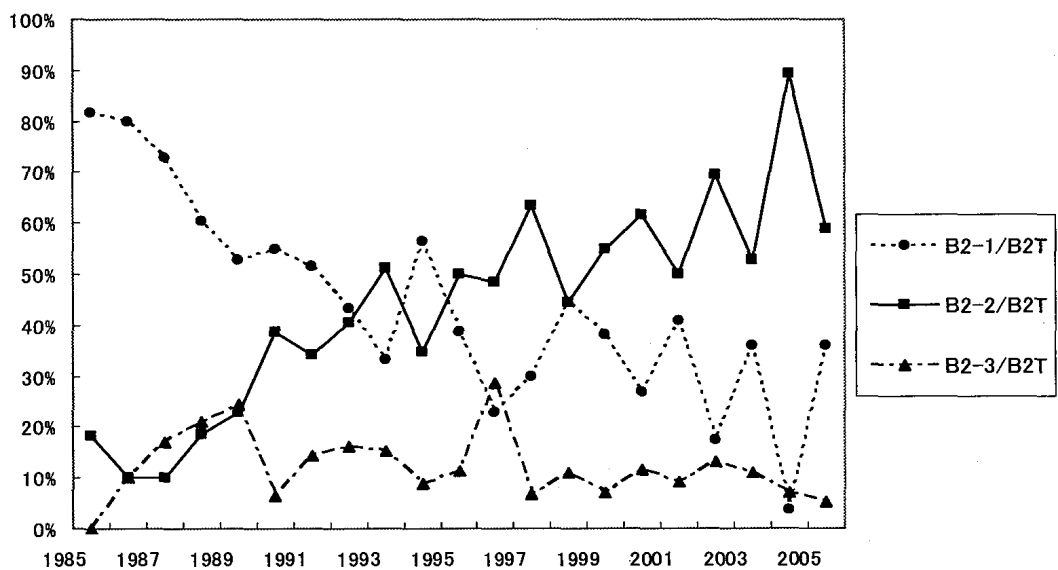
※B2: 情報あり, 現在との比較・関連づけあり (比較・参照型)

B2-1: 「公論」的テーマ

B2-2: 「私生活」的テーマ

B2-3: その他

表 5-b 言及領域別データ 比較・参照型記事総数に対する比率の推移



る。前者では、コミットメントのなんらかの正統化が求められ、後者では、それが不要とされるはずである。そして、ある問題が公的領域から私的領域に移された場合、そこに存在していた対立や矛盾が、解消もしくは無化されたこと、あるいは、されつつあることを意味すると考えられる。ここでの2タイプの設定は、このような発想に由来するものである。

この基準にしたがってB2の内容を詳細に検討すると、それまで見えなかった変化が歴然とする(表5)。すなわち、B2-2の「私生活」的テーマの比率の着実な上昇である。先に確認したように、B2タイプ、すなわち、昭和30年代を現在と比較もしくは関連づけるタイプの記事自体の数には、1990年代以降あまり増減はない。しかし、そのB2タイプのうち、B2-1「公論」型の比率が明確に低下し、それに対応するかたちでB2-2「私生活」型の比率が上昇している。表の右から2列目、B2タイプ総数中に占めるB2-2タイプの比率をみると、80年代後半にはB2全体の10パーセント台にすぎなかったが、90年代後半には50パーセント前後、2000年代に入ると60パーセント程度に達している。

こうした傾向は、5年区分でデータを再整理すると、よりはっきりする。表6は、表5を5年期単位で編集しなおしたものである(1985年のデータは割愛した)。B2-1「公論」型は、1986~90年期65パーセント、91~95年期43パーセント、96~00年期33パーセント、01~05年期28パーセントと急減しているが、B2-2「私生活」型は、同期間に、19パーセント、43パーセント、54パーセント、64パーセントと急増している。要するに、昭和30年代と現在を比較ないしは関連づける記事の総数は変わらないが、過去20年のあいだに、その比較・関連づけの領域に顕著な変化があったということである。

3. 今後の課題

データの検討から導いたのは次の三つの指摘である。

「昭和30年代」の語られ方の変容

1. 「昭和30年代」記事総数は、1980年代に比べて90年代に急減し、その後はほとんど増減がない。
2. 昭和30年代と現在を比較もしくは関連づける記事数も、1980年代に比べて90年代に半減し、その後は微減の傾向にある。
3. 昭和30年代と現在について、人々の生活や趣味、社会風俗などを比較したり関連づけたりするタイプの記事は、過去20年間一貫して増加傾向にある。その結果、比較・関連づけタイプの記事の総数に対して、それが占める比率は、過去20年間で著しく上昇した。

この新聞記事の言及領域の変化は何を意味しているのだろうか。まず考えられるのは、年月の経過と共に昭和30年代に対する関心の焦点が変化したことである。一般的に、直近の時期には、その時代から継続している懸案その他、社会関係の特定の局面に関心がいくであろう。昭和30年代は高度成長の時代であると同時に、そのひずみが社会の至る所にあらわれた時代であった。農村解体と都市化の進行、公害の多発と生活環境の悪化、産業の「二重構造」の発生、産業事故や交通事故の急増等々。こうしたひずみは、国内における政治的な路線対立の深刻化をもたらし、保守と革新、資本と労働が真っ向から衝突する場面も少なくなかった。しかし、時代の経過のうちにそうした問題の多くは落着し、昭和30年代に由来する「公論」的テーマも減少していったと考えられる。

しかし、それだけでは1990年代以降の「私生活」型テーマの急増を説明できない。時間の経過がその時代に対する関心を低下させるのであれば、このタイプの記事も減少するはずである。実際には、比率的に上昇しているだけでなく、数の点でも1986～90年期から一貫して増加している。おそらく、昭和30年代以来の問題や懸案に対する関心がこうした傾向を生み出したというよりも、1990年代以降の社会が昭和30年代の「何か」に関心を寄せるような状況にあったということであろう。試みに、

表 6 の各 5 年期の社会状況を端的にあらわしてみると、次のようになる。

1986～90 年期 バブル期

1991～95 年期 バブル崩壊後の「失われた 10 年」

1996～00 年期 「失われた 10 年」、社会構造の転換が本格化⁸

2001～05 年期 小泉「改革」(2001～), 非正規労働者急増

こうした社会状況と、新聞記事の中での昭和 30 年代テーマの変化を関連づけて考えることができるのではないだろうか。たとえば、現在において人々が漠然と感じている不安や、経済状況、社会状況の先の見えなさが、「貧しくても夢があった」、「右肩上がりの成長が信じられた時代」としての昭和 30 年代への関心を呼んでいると言えるかもしれない。あるいは、現在における「人間関係の希薄さ」が、「人情味あふれる昭和 30 年代」への憧れとなっているのかもしれない。

むしろ、以上の解釈は、いわば憶説である。「昭和 30 年代」記事のテーマ領域の変化と社会意識の変化、および現在の社会意識に関して実証的に説明するためには、少なくとも、さらに次のような問題を検討する必要があると思われる。

1. 過去の出来事の扱われ方に、一種の「ライフ・サイクル」があるのではないか。もし、当初「公論」型の言及がされてきた出来事に対して、やがて「私生活」型の言及がされるようになるという一般則があるのなら、「昭和 30 年代」記事のテーマ領域の変化は、一般則の一事例にすぎないことになる。この点を確認するために、昭和 20 年代や昭和 40 年代についてもその扱われ方の経年変化を検討する必要がある。
2. 仮に、「昭和 30 年代」記事のテーマ領域の変化から現在の「私生活」領域になんらかの問題があると考えてよいとして、それは具体的にどのような問題か。この点について、「私生活」型テーマ記事の関心の焦点をさらに微細に検討する必要がある。また、その経年変化の検討も必要である。

3. 社会状況の重大な変化が、「昭和 30 年代」記事の変化と相関関係にあるかどうか。データ数から考えてかなり困難だと思われるが、バブルの崩壊や昭和天皇崩御といった出来事とテーマ領域の変化の関係は検討する必要がある。この場合も、関心の焦点の微細な検討が必要である。

もとより、以上は今後の課題である。同時に、データ数の限界を克服すること、あたら限り主観性を排した分析手法を確立することも今後の課題である。

4. むすび

今日のいわゆる「昭和 30 年代ブーム」で照明が当てられているのは、もっぱら昭和 30 年代の私生活領域に属するものごとである。漫画作品や書籍、博物館展示、テーマパークなどのメディアが扱っているのは、地域の生業、毎日の食事や人々の服装、子どもの遊び、近隣の間人間関係など、「私生活」的テーマがほとんどである。当時の社会問題などの「公論」的テーマが扱われる場合がないわけではないが、その場合でも、最終的にはそれに対する私的な感慨の吐露というところに行き着くことが多いようである。いずれの場合も、その時代の問題点や対立には目をつぶり、もろもろの事物を肯定的に把握して安らぎを見出すという、いわば「ノスタルジアの語り口」とでも言うべきものが見て取れる。逆に言えば、人々に楽しさ、心地よさを提供するそうした「私生活」的テーマだからこそ、ブームとなったと言えるのかもしれない。

本稿で扱ったのは新聞記事であり、その性質上、多くは、他のメディアに比べて直接的にノスタルジックな文言で昭和 30 年代を語っているわけではない。だが、昭和 30 年代の「公論」的テーマへの関心を低下させながら、「私生活」的テーマに関心を寄せるようになった社会が、博物館展示やテーマパークにおける「昭和 30 年代ブーム」をつくり出し、同時に、新聞の「昭和 30 年代」記事を増加させていると考えるのが順当であ

ろう。もとより、他のメディアのブームが新聞記事に反映され、そうした報道がブームに拍車をかけるという連鎖が存在するだろうことは、言わずもがなである。こうした連関は他のメディアの「昭和30年代」言説を詳細に検討し、新聞記事との関係を分析することで明らかになるだろうが、残念ながら、ここで立ち入る余裕はない。

本稿は、昭和30年代の扱われ方に劇的な変化があったことを明らかにした。過去の扱われ方がある時期から変化したということは、その過去を扱う社会の側が変化したということである。変化があったことの指摘とその変化の分析は、まったく別の問題であるが、そうした変化があるということ自体からも、現在語られる過去が素朴に考えられているような過去「それ自体」などではなく、現在における編集・制作の産物であることは明らかである。すなわち、それは「物語」なのである。過去についての「物語」が、現在において編集・制作されたものであるならば、どういった物語が時代ごとに語られているかを検討することによって、逆にその時代の特徴についてなんらかのことを言えるはずである。過去とはそれを語る社会について考える手引きなのである。本稿はその手引きを読み解くための準備作業であった。

※本稿は、2006年度日本社会学会大会での報告原稿を改訂したものである。

¹ たとえば、博物館における歴史展示には、展示制作者の意図があらわれている。

² 過去の構築性についての議論は、片桐(2003)などを参照。

³ 「ALWAYS 三丁目の夕日」は西岸良平の漫画『三丁目の夕日』(小学館ビッグコミックスピリッツで1974年から連載中、1990年にテレビアニメ化した。)を原作にし、ヒットした。

⁴ たとえば、新横浜ラーメン博物館(1994年開館)、台場一丁目商店街(2002年オープン)、日之出食堂(居酒屋チェーン店)など。しばしば雑誌やテレビ等で取り上げられている。

⁵ 寺尾(2004)を参照。また、浅岡(2005)はメディア論的視点から「昭和30年代」表象を研究している。

「昭和30年代」の語られ方の変容

- ⁶ 国会図書館蔵書のうち、タイトルまたはサブタイトルに「昭和30年代」という語句を含む書籍の所蔵件数。たとえば、『昭和30年代を歩く：懐かしいあの頃に出会える』といったタイトルの書籍である。なお、この件数のなかには、編年的に編纂された官公庁文書も含まれている。たとえば、『食糧管理史 総論 第3 昭和三十年代』など。データは <http://opac.ndl.go.jp/index.html> から入手した（最終アクセス日：2006年9月25日）。
- ⁷ データは <http://database.asahi.com/library/> から入手した（最終アクセス2006年9月25日）。記事では、「昭和30年代」、「昭和三十年代」、「昭和三〇年代」の三通りの表記があったが、本稿では一括して「昭和30年代」として扱っている。
- ⁸ たとえば、山田(2004)、玄田(2004)などを参照。

参考文献

- AERA 編集部「昭和三十年代 日本人の原風景」『AERA』2003. 4. 4, 52-56.
- 浅岡隆裕, 2005, 「見出された昭和30年代——メディア表象の論理と過程から——」『応用社会学研究』No. 47: 31-49, 立教大学社会学部.
- Davis, F., 1979, *Yearning for yesterday; A Sociology of Nostalgia*, The Free Press. (=1990, 間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳『ノスタルジアの社会学』世界思想社.)
- 玄田有史, 2004, 『ジョブ・クリエイション』日本経済新聞社.
- Habermas, J., 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der burgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag. (=1994, 細谷貞雄・山田正行訳『第2版・公共性の構造転換』未来社.)
- Halbwachs, M., 1950, *La Mémoire Collective*, P. U. F. (=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社.)
- 浜日出夫, 2000, 「『歴史の社会学』の可能性」『別冊情況 現代社会学の最前線 [3]』情況出版.
- 片桐雅隆, 2003, 『過去と記憶の社会学』世界思想社.
- Mead, G. H., 1932, *The Philosophy of the Present*, The Open Court. (=2001, 河村望訳『現在の哲学・過去の本性』人間の科学社.)
- 寺尾久美子, 2004, 「空間構成とノスタルジア——博物館の「昭和のくらし」展示から」『日本民俗学』第238号: 89-105.
- 辻村明, 1981, 『戦後日本の大衆心理』東京大学出版会.
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会』筑摩書房.